

昭和 S P レコードで辿れば

昭和十六年十二月八日

S P レコード収集家■城内 實

(一)

毎年八月十五日の終戦記念日を迎えるたびに、大東亜戦争とはいったい何だったのかと自問自答するようになった。

昭和十六年十二月八日のハワイ真珠湾の奇襲攻撃、マレー半島上陸、比島攻撃、泰国進駐、香港海上封鎖が始まった大東亜戦争は、ある日突然始まったわけではない。昭和六年の満州事変、昭和八年の国際連盟脱退、昭和十二年の支那事変、昭和十五年の日独伊三国同盟締結、昭和十六年の南部仏印進駐と対日石油輸出禁止措置等々、それに至るまでのさまざまな出来事が積み重なって起こった戦争であった。もっとも開戦直前まで戦争回避に向けた努力はなされていた。

「帝国国策遂行要領」を決定した昭和十六年九月六日の御前会議で昭和天皇が「四万の海みなはらからと思う世に など波風のたちさわぐらむ」という明治

天皇御製を読み上げられ、政府と軍部が意図している戦争方針に反し、外交努力をもって戦争を回避すべしとの意思表示を立憲君主としてぎりぎりの婉曲的な表現でこれを行った。また、同年十月に東條英機内閣の外相に就任した東郷茂徳は親日家のグルー駐日大使に対して第三者を介して日米和平の外交工作を行ったりもした。しかしながら、日本陸軍全体及び海軍軍令部を中心とする対米軍事決着路線とルーズベルト大統領の冷厳な対日認識、ハル国務長官の非妥協的な原則主義（支那からの撤兵、

南京政府の否認、三国同盟の離脱）の前に対英米蘭戦回避の努力は失敗に期するのであった。

(二)

昭和十六年十一月二十六日、南雲忠一中将に率いられた六隻の空母と戦艦二隻を中心とする総計三十隻の帝国海軍機動艦隊は択捉島の単冠湾^{ひとかづぶ}を出航し、ハワイ諸島に向かった。同日、米国は東郷外相発案なる乙案をも拒否し、逆にハル・ノートを提示した。これが事実上の最後通牒となったため、機動艦隊は作戦中止命令を受けて引き返すこともなく、当初予定どおりの進路を保った。良好な天候という好条件にも恵まれ、ついに十二月八日第一次攻撃隊の一八三機が空母を飛び立ち、オアフ島

内の敵艦、飛行場を猛爆した。一六七機の第二次攻撃隊もこれに続き、真珠湾の八隻の米戦艦の内アリゾナはじめ四隻が撃沈した。この奇襲作戦は完全に成功し予想外の大戦果をあげることができた。

レコード界ではこのハワイ海戦を題材にしたものが各社から発売された。日本コロムビアからは「ハワイ海戦」、「ああ特別攻撃隊」が、日本ビクターから「ハワイ大海戦」、テイチク「ハワイ大空襲の歌」、キング「ハワイ撃滅の歌」、ポリドール「ハワイ海戦」等が発売された。

日本コロムビアの「ハワイ海戦」の歌詞は歌壇の第一人者佐々木信綱作詩である。二番と四番の歌詞を紹介する。

烈風劈きて 荒鷲の
ハワイへ翔る 大編隊
怒涛を裂きて 潜航艇
目ざす未明の 真珠湾
おお神明の 加護あつく
手中に握る 敵艦隊

油は尽きて 翼折れて

還るもまじる つわものを
母艦に待てる 戦友が
とる手に熱き 涙散る
この感激の 陰にして
還らず五隻 二十九機

(三)

手元に昭和十七年六月にティ
チクから十二枚組で発売された
「大東亜戦史」と昭和十八年三
月にニツチクから十枚組で発売
された「勝利の記録」がある。

この二つのレコード・アルバ
ムは大東亜戦争に関する当時の
代表的な音の記録である。

十二月八日の開戦は臨時ニュ
ースのチャイムの音ではじまる。
「臨時ニュースを申し上げます、
臨時ニュースを申し上げます。
大本営陸海軍部十二月八日午前
六時発表、帝国陸海軍は本八日
未明、西太平洋においてアメリ
カ、イギリス軍と戦闘状態に入
れり。帝国陸海軍は本八日未明、
西太平洋においてアメリカ、イ
ギリス軍と戦闘状態に入れり。」

その数時間後に先帝陛下の宣
戦の詔書が渙発せられた。同日

午前ラジオで放送された中村
茂アナの謹奉読による詔書はニ
ツチク盤にプレスされている。

「天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇
祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ、
昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示
ス。朕茲ニ米國及び英國ニ對シ
テ戦ヲ宣ス。朕カ陸海將兵ハ、
全力ヲ奮ツテ交戦ニ從事シ、朕
カ百僚有司ハ、勵精職務ヲ奉公
シ、朕カ衆庶ハ、各々其ノ本分
ヲ盡シ、億兆一心、國家ノ總力
ヲ舉ケテ、征戦ノ目的ヲ達成ス
ルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ。

(中略) 今や不幸ニシテ米英
兩國ト覺端ヲ開クニ至ル、洵ニ
已ムヲ得サルモノアリ。豈朕カ
志ナラムヤ。(中略) 東亞安定
ニ關スル帝國積年ノ努力ハ、悉
ク水泡ニ歸シ、帝國ハ存立亦正
ニ危殆ニ瀕セリ。事既ニ此ニ至
ル。帝國ハ今や自存自衛ノ爲、
蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎ス
ルノ外ナキナリ。…」

(四)

この開戦の詔書謹奉読の後に
東條英機首相による「大詔を拝



し奉りて」が続けて放送された。

「精鋭なる帝国陸海軍は今や

決死の戦いを行いつつあります。
東亜全局の平和はこれを念願す
る帝国のあらゆる努力にもかか

わらずついに決裂のやむなきに
至ったのであります。元来政府
はあらゆる手段を尽くし、対米
国交調整の成立に努力してまい
りましたが、彼は従来の主張を
一步も譲らざるのみならず、か
えて英蘭支と連合し、支那よ
り我が陸海軍の無条件全面撤兵、
南京政府の否認、日独伊三国条
約の破棄を要求し、帝国の一方
的譲歩を慫慂して参りました。

これに対して帝国はあくまで平
和的妥結の努力を続けて参りま

したが、米国は何ら反省の色を
示さず今日に至りました。…」

(五)

ニツチクの「勝利の記録」で
はハワイ海戦のみならず、「Z
旗ふたたび」と題してマレー沖
海戦の様も吹き込まれている。

南方の皇軍将兵は十二月八日
英領のマレー半島に上陸、十日
のマレー沖海戦ではシンガポー
ルを根拠地とする英国東洋艦隊
の中核「プリンス・オブ・ウェ
ールズ」及び巡洋戦艦「レパル
ス」がクワンタン沖で帝国海軍
航空部隊によって撃沈され、日
本国民はこの緒戦の大戦果に沸
いたのであった。

(続く)